

「生命」から「時間」へ —19世紀フランス哲学の視点から

村松 正隆（北海道大学）

☆ 「19世紀フランス哲学」というテーマからの読解

- 実際のところ、19世紀のフランス哲学者への言及はほとんどない。例外は Charles Secrétan, *Philosophi de la libeté*（『自由の科学』）への言及だが、重要性を持つようには見えない。
- とはいえ当然ながら、19世紀フランス哲学の全般的動向の延長線上に位置づけられる。
- また、19世紀における哲学史的研究の成果をも取り上げているようには見える。

1. 全般的動向と『時間観念講義』

「数学を排除しない心理学的な考え方」「心理学を排除しない数学の考え方」（p.265）

「こういったことすべてが私たちに証しているのは、時代の雰囲気の中に、そして自然についてのこの新たな一般的ヴィジョンの帰結として、次のような傾向があったということです。すなわち、運動のうちに、その〔空間的〕で外的な側面だけでなく、その内部（intérieur）、内包性・強度（intensité）と呼べるようなもの、生、内的な生と呼べるようなものをも考察しようとする傾向が存在していたのです。」（p.268）

⇒ ただし、全体として〈生命〉の概念に依拠する箇所は少なく見える。

19世紀フランスのスピリチュアリズムの戦略

- ※ 実証科学の成果を尊重しつつ、そのうちに、それらの成果だけでは説明できぬ「剰余」を見だし、これを « spiritualité » と関連付けて論じる。
- ※ この戦略が最も露骨であるのは、ラヴェッソン（1813～1900）。彼は、生物学や医学をある程度考慮しつつ、あらゆる科学が「スピリチュアリズム」に向かう、とする。

「ところで今日においては、自然の質量を対象とする科学のうちに閉じこもり、より複雑で高度な次元の事象を扱う科学を顧慮することもないままで、生命の科学や芸術、そして芸術の根底をなしている詩作、そして一般に知性的で道徳的な次元の研究に一切関わりを持たずにいるということは、以前に比べれば稀になっている。かくして唯物論は、そのようなさまざまな強い影響の下で、時節に忠実なままでいることが難しくなり、徐々に変様変質しつつ何か別の、スピリチュアリズムの刻印を多かれ少なかれ帯びた理論へと転じるのである。」（ラヴェッソン『19世紀フランス哲学』第36講、邦訳 p.312）

☆ この指導理念のもと、コントやさらにはテーヌさえも、スピリチュアリズムの陣営に取りこもうとする強引（傲慢）な方針

「テーヌはこの二つの方向〔唯物論とスピリチュアリズム〕の間で迷ってはいるものの、おそらくは、どんな美をも感じ取るその高い知性で、次第に第二の方向に同意していくことだろう。」（同書第 11 講、邦訳 p.130）

☆ ベルクソンの先行世代の方針は、このラヴェッソンの方針を受けつつも、より謙虚な仕方ですべてこれを実行するべきだとするものだったと言える。

Jules Lachelier (1832~1917) 『帰納法の基礎』(1871)

※ 科学の方法たる帰納法が可能であるためには、動力因に支配されていると見える現象の背後に、目的因の支配される「力」の概念が必要であるとする。

Émile Boutroux (1845~1920) 『自然法則の偶然性』(1874)

※ 自然の領域を切り分け、複雑さが増えると、偶然性の働く範囲が増えていく、と考える。

☆ これらの書物は明らかにベルクソンの発想の下敷きにある。

☆ 敢えて言うなら、ラヴェッソンが「生命」の名で、Lachelier が「力」の語で捉えたものを、「時間」という概念を軸に描こうとするのがベルクソンの戦略

2. 哲学史研究の進展

☆ 特権的な哲学者たち：アリストテレス、プロティノス、デカルト、ライプニッツ

デカルト

⇒ 「持続の直観」と「体系の精神」(p.280)との間をゆれ動くデカルト、という像は案外独創的かもしれない。

⇒ 源泉はどこか？ Émile Boutroux (*De Veritatibus aeternis apud Cartesium*, 1874) と Louis Liard (*Descartes*, 1882) あたりが想定される。前者は、永遠心理創造説を契機に、形而上学的デカルトを強く打ちだす。後者はデカルトの自然学が形而上学抜きでも成り立つ、と主張する)

⇒ Jean Wahl, *Du rôle de l'idée de l'instant dans la philosophie de Descartes* における議論は、Bergson の描くデカルト像を媒介として出て来ているように見える。

☆ この「ゆれ動くデカルト」という像は、ベルクソンにおいて頻繁に見られるものか？ ま

た、このデカルト像が 20 世紀のデカルト研究に影響を与える面はあったらどうか？

スピノザとライプニッツ

- ⇒ スピノザに対する沈黙
- ⇒ スピノザに対抗するためにライプニッツを出してくるという戦略（1830 年ごろからの、フランス版汎神論論争とその余波）
- ⇒ ライプニッツについては、19 世紀後半からの研究が高まるという状況がある。特に、ラヴェッソンによるライプニッツの導入。
- ⇒ 「欲求」「努力」を軸に据えるライプニッツ解釈から、実体概念の強調へ（Émile Boutroux, *La philosophie allemande au XVIIe siècle*, 1897 も見よ）。ライプニッツをデカルトの延長に位置づけるか、むしろ距離をとるのか、という問題）

- ☆ ライプニッツの解釈はやや恣意的にも見える（デカルトと同じように記述できない？）
- ☆ スピノザ（ならびに近世哲学）とプロティノスとの類似の指摘(p.245)は極めて印象的だが、それにしても、スピノザに対する沈黙はどうしたものか？ 単純に扱いにくい、ということの良いのか？ 「永遠」と時間性という点では、むしろこの講義の主旨にあうようにも思えるが。

3. やや大きすぎる質問として

- ☆ 『創造的進化』第 4 章との連関は明らかだろうが（一部には完全に引き写しと思われる箇所もある）、この講義と『創造的進化』第 4 章との間には、どのような差異があるだろうか？ 講義録と著作の違いとして処理してしまってもよいのか？